

書評 立原慶一 宮田光雄著『《放蕩息子》の精神史～イエスのたとえを読む～』

立原慶一

Book Review MIYATA, Mitsuo; *"Houtou musuko" no Seishinshi (A spiritual history of "The Prodigal Son")*

Yoshikazu TACHIHARA

1. 本書の意図について

著者（1928年～）は『西ドイツの精神構造』（岩波書店、1968年、日本学士院賞）や『宮田光雄集』（全7巻、岩波書店、1996年）を初めとして、西欧政治思想史関係の浩瀚な書物を著している著名な政治学者（東北大学名誉教授）である。近年、氏はいわば自らの学問的レパトリーを拡げるかのように、宗教芸術関係の著作や講演を精力的に行っている。高年で音楽や美術の芸術表現に着目し、全人格をかけてそれと真っ正面から向き合おうとしている。

芸術作品を前にして、人文学者が感性人間として在ろうとしていることの意味は大きいと思う。著者の鑑賞体験には真摯に耳を傾けるに値しよう。ここで感性とは意味や心情など、ワン・センテンスとして存在する論弁的内容を直観的に把握する能力のことである。それらは、概念的な理解という形としてしか捉えることができない、と考えられていた。しかし感性の働きは感じられるものに変容させることができるのである。

宗教芸術の中でも、とくに宗教美術を正当に鑑賞するためには、神学的並びに図像学的教養が道標として必要とされる。しかしながら、あたかも文脈を辿るような営みが嵩じるあまり、鑑賞とは名ばかりでたいてい実質は、作品の学的探究に偏ってしまうものである。この知性主義的な姿勢は美術館主導によるアメリカ鑑賞教育論の一部に顕著である。しかし著者は解説型の鑑賞行為に安んじず、自らの感性によって作品のよさや美しさ、さらには作者の意図や心情を主体的に味わおうとしている。

そうした点で筆者はこれまで注目してきた。キリスト教美術は教義に基づいているから、その文脈を辿りながら作品世界を読み解くことが大切である。生徒の発達段階や授業時間など、学校教育実践をめぐる諸条件を勘案する限り、読解以上の営みは望めないのではないかと、この見解も一方にある。しかしそれでは鑑賞活動そのものが情趣的に、無味乾燥になってしまうのではなかろうか。このような問題意識を抱きつつ、本書で語られた鑑賞体験に直面するとき、その鑑賞法は根本的にどうあるべきなのか。それを突き詰めてみたい、との思いに駆られるのである。

それはとにかく、福音書に記された「放蕩息子」のたとえ話は、これまで歴史的に様々な解釈と造形を生み出してきた。現代に生きる私たちはこのたとえから一体、何を読み取ることができるのであろうか。こうした問題意識に基づいて、著者は豊富な学識と鋭い洞察力をもって解釈史を丁寧に辿る。そこで神と人間のドラマがユーモア感覚を交えながら読み解かれていく。本書刊行のねらいは私たちが「イエスのメッセージから伝わってくる神の大いなる愛に対する《根源的信頼》」にもとづいて、…信仰と証しのわざに取りかかる

元氣と力を取り戻」(188頁)すことにあるという。

2. 本書の内容構成

本書全体は二部構成を採り、第一部では《放蕩息子》を描いた多くの美術作品が、著者の実感の下に鑑賞されている。作品は初期中世から今日にいたるまで、代表的なものが時代編年的に辿られている。中世期の『ビザンツ古写本(11世紀)』『豚の傍らの放蕩息子(ブルージュ、13世紀)』『ゴスラーの聖福音集(ドイツ、1230/40年)』等から始まり、私たちになじみの深いアルブレヒト・デューラー『放蕩息子の回心』(1498年)、ヒエロニムス・ボス『放蕩息子』(1510年)、レンブラントによる『放蕩息子』(1632-1669年)の連作が続く。

20世紀に入り、クリスチャン・ロールフスの『放蕩息子の帰還』(1916年)、エルンスト・バルラッハ『再会』(1926年)、マルク・シャガール『放蕩息子の帰還』(1975-1979年)。アジアでは、中国の《剪纸》(切り絵)技法による何琦(ヘーティ)の『放蕩息子』(1990年)、並びに范朴(ファン・プー)の『放蕩息子』(1999年)。彼らは中国に吹き荒れた文化大革命で地方に「下方」されたり、宗教弾圧に遭遇したりする中で「剪纸」芸術と出会い、それを自らの主題表現のための方法として熟成させていった。さらに日本では渡辺禎雄『最後の晚餐』(1982年)と、渡辺総一『息子の帰還』(1997年)が取り上げられた。後者の作品は本書のカバー絵『来なさい、休ませてあげよう』(2009年)として使われている。

「放蕩息子の帰還」のたとえを題材とした、これら諸作品は時代の流れと文化的風土との関わりの中で制作されたのであるが、神学的及び図像学的な教養を踏まえながら、現代の私たちに対する福音のメッセージが、著者の感性によって深く把握されている。こうした鑑賞体験の中身を詳細に検討することによって、私たちは教義に浸透された宗教美術を単なる文脈探究ではなく、自らの実感に基づきつつ鑑賞するための、妥当な方法をここに探り当てることができると思う。

第二部では《放蕩息子》のたとえについて、最近の聖書学的成果を参照しながら、テキストの釈義が試みられている。著者はこの物語の《解釈史=影響史》を、古代教会から現代にいたるまで概観する。その視点からは、一つのたとえ話しがイメージ豊かに広がっていくさまを、興味深く見渡すことができるのである。

20世紀の初め、《放蕩息子》の題材はアンドレ・ジイド、さらにはライナー・マリア・リルケらによって近代文学に復活する。ただし「聖書のテキストをモデルとする恰好はとっています、それは、あくまでも上べだけにとどまっています。ジイドは、それを外枠として利用しただけで、実際には福音書とはまったく別の内容を盛っています」(153頁)。

「リルケは、《放蕩息子》に仮托しながら、聖書テキストからできるかぎり宗教的イメージを払拭しようとしているかにみえます」(158頁)と批評し、ここで著者は本書が拠って立つ宗教的な立場を理論的に自覚する。このように彼らの文学的表現は宗教的な物語から、はずれるものとして特徴づけられている。むしろ特定の信仰を受け入れようとしない、近

代的人間の精神構造が現れている（152頁）。それは信仰の確かさを求めるというよりも、自我の追求以外の何ものでもない（152頁）。自分自身の存在を問題にするような、人間の実存のあり方を探求して、精神の冒険に向かう青年を描いている、と論定する。

第二部最終の第5章では、福音がもつ希望のメッセージを日本の現実に引きつけて読み直す、という著者ならではの壮大な企てがなされている。それは現実と人間に対する知見を獲得することによって、宗教観を見定めるような議論へと発展する。それが可能になり実を結ぶのも、自宅の敷地内に学寮を建て仙台在住の一般学徒と共に、「宮田聖書研究会」を長年にわたって開き続けてきたからこそであろう。本章は環境の破壊者・汚染者としての人間存在に対して、「責任主体へと私たちを目覚めさせてくれる《明日への希望》」（187頁）を指し示そうとの試みである。

3. 鑑賞体験論

著者はG. ヴィーダーアundersの『アルブレヒト・デューラーの神学思想』（1976年）からの引用を交えながらデューラー作品を鑑賞する。「祈りつつ神に身を向けるなら、神は赦しをあたえ、受け入れて下さる。『ここには、キリスト者のなすわざは祈ることである、という大分あとのルターの発言が、すでに聞きとられる』のです。じっさい、この絵にほとぼしり出ている内面性のパトスは、宗教改革の時代の言語に通ずるものがあります。いな、この放蕩息子の固く組み合わされた手や仰ぎ求める真剣な眼差しを、その足下の汚泥と見較べるなら、このたとえの内的な真実が、つねに、いかなるところでも、体験されうることを実感するでしょう」（33-34頁）。

デューラーの作品では、帰還への決意を秘めた真剣味溢れる放蕩息子の所作と、彼が悲惨にも汚泥の上に立っているという情景の対比構造がもたらす、複合感情的効果の妙味が確認される。そうした美的体験がパイプ役となって、祈りによって神は私たちを受け入れてくれるという、ワン・センテンス的テーマが直観的に把握されている。東日本大震災は合理性一辺倒と見なされた現代日本社会の底流に、祈りがあることを広く知らしめたが、この絵は被災後の私たちにリアリティをもって迫ってくるのである。

（ボス作品の鑑賞）「放蕩息子は、いま一度、ふり返ります。彼の人生の暗黒の側面に背を向けて、新しい光の生活を目指そうとしています。放蕩息子の悔い改めが生じたのです。そうした観点からすれば、全体としてほぼモノクロームに近い色調も暗示的です。放蕩息子の衣服が灰色なのも、『粗布をまとい、灰をかぶ』る（マタイ 11・21）悔い改めのしるしにつながるのかもしれませんが。知恵の鳥であるフクロウは、おそらく死とその克服との知恵を象徴化しているのでしょうか。ここでは、フクロウは旅立つ者の頭上にあって滅びから生命への道と呼びかけているかのようです。彼方の丘と野原には緑が広がり、太陽の光をうけた遠い地平線の辺りには、懐かしい父の家も望まれます。すぐ傍の木戸の後ろに寝そべっている赤い牛も象徴的です。あるいは、ボスは、旧約聖書において犠牲とされる『無傷で欠陥のない赤毛の牛』（民数記 19・2）を考えていたのでしょうか。それは、イエスの

犠牲による赦しの想起につながるでしょう。旅立つ放蕩息子の背後でこの木戸が閉じられるとき、罪の過去はほんとうに過ぎ去ったものとなり、新しい未来の人生が開かれてくるのです」(38頁)。

ヒエロニムス・ボスの作品では神学的教養として、『マタイによる福音書』第11章第21節及び『民数記』第19章第2節、さらに図像学的教養として「知恵の鳥であるフクロウ」が鑑賞行為の道標であるかのように、知的文脈的な確認がなされている。知性と想像力の働きは宗教美術を鑑賞するためには不可欠なのである。しかしそれだけに留まれば、美術史的に作品世界を解釈するにすぎない。ここで著者の鋭敏な感性が発揮されている点に注目したい。「暗黒」と「光」という、二項対立的な形態特性が構造化されることでもたらされる、「明暗の対比という美的秩序」が意識され、単独の美的特性として「モノクローム(の色調)」「灰色(の)」「緑(色の)」「赤い」「閉じられた」という形態特性、「悔い改め(た)」「懐かしい(眺望)」という感情特性、「寝そべつ(た)」という行為特性など、豊かな感情性の襞が作品から形容詞句として感受されている。それらが重層的に交錯することで、最終的に「未来における新しい人生」という主題が、感性的に把握されている。

(レンブラント作品の鑑賞)「父の膝の前にくずおれた彼の姿は、もはや子と呼ばれるには値しないという、言葉では表されなかった彼の悔改めの深さを示しています。やさしく父の手が彼の肩におかれ、手許に引き寄せようとしています。父の両手の10本の指が互いに開かれたままになっているのも印象的です。父の目は半ば閉じられ、帰ってきた若者のまとうぼろの衣服も、すり切れた草履も、目に入らないようにみえます。父は、これが自分の息子であることを、ただ感じとり確かめようとしているのです。……父と子は、出会いと再会における感動と喜びを無言のまま心の底で感じとっているだけです。それまでレンブラントは、光の効果を生み出すために暗い夜の場面を好んで設定してきました。ここでは、逆に、もっとも明瞭に神の秘儀を予感した老いたる父を盲目にしてみせたのでしょうか。いずれにせよ、ここには、みずからの罪の引き起こした苦難によって打ちくだかれたたましいが、ただ神のあわれみと赦しによってのみ生きうることを示しています」(52頁)。

著者は、鑑賞活動で最終的に行われるべき主題感受の前に、第一に父親の所作が慈愛の大きさを、息子のそれが悔改めの深さを示し、それらが対比構造的な表現性に達する事態を確かめている。第二に「開かれた」と「閉じられた」という、二項対立的な形態特性が構造化されることで醸しだされる、「開閉の対比という美的秩序」が意識される。続いて単独の美的特性として「悔改め(た)」「感動(的な)」「喜び(に溢れた)」「苦難(に満ちた)」という感情特性、「ぼろの」「すり切れた」という趣味特性、「やさし(い)」という行為特性、さらに感情特性に基礎づけられた思想・心情内容として「神の秘儀」をそれぞれ受容する。それら感情性の襞を形容詞として作品から複合的に把握することが前提となって、神の憐れみと赦しによってこそ営まれる生という、ワン・センテンス的テーマが感受されている。

(シャガール作品の鑑賞)「彼らの前方には結婚したばかりの一组のカップルが並び、花嫁は白いヴェールを被っています。彼らから少し離れて、その下にはシャガールの二度目の妻ヴァランティーンが赤いスカートをつけた姿を見せています。彼女は、摘み取ったばかりの花の束を再会する父と息子に差し出しています。ここには、帰郷した放蕩息子を包む愛と喜びの感情が直截に表現され、イエスのたとえ話と独特な形につながっていることがわかります」(73-74頁)。

シャガール作品の鑑賞では、「白」と「赤」の色遣いという二項対立的な形態特性が構造化されることでもたらされる、「色彩の対比という美的秩序」が意識されている。また絵に登場する人物の誰何や、その所作のもつ表現効果が果たす役割も、美的なものとして一つひとつ確かめられる。それら複合的感受が前提となって息子を包む愛と、喜びの感情が主題として感性的に把握されている。

作品に介在する神学的及び図像学的規約を確認するために、知性と想像力が働かされることも確かに必要であろう。だが、著者の鑑賞法に一貫して流れているのは、学的文脈的な探究法に支配されるのではなく、自らの素直な感性によって作品のよさや美しさを初めとして、作者の意図や心情を形容詞句さらにはワン・センテンス的テーマとして実感することの大切さであろう。

4. 登場人物論

生家からの旅立ちという弟の発想と行動には、「父にたいする自由と独立と自立への願いが息づいているのではないのでしょうか」(165頁)。「若い息子=弟にとって問題なのは、一言でいえば、彼の《自己実現》への要求とってよいでしょう」(166頁)。著者は弟の旅立ちを未熟ではあるが、是認されるべき自立への願望だと共感している。内から湧き上がる独り立ちへの意欲をはなから否定しようとはしないのである。

しかし「過去への反省もなく、現実への認識もなく、未来への予測もなく、ただ現在の一瞬が華やかに刺激的に生きられることを追求する」(167頁)のはいけないと語り、欲望や個人的欲求、私的関心など直接的なものから距離を置けない、身勝手な生き方に注意を与える。

「旅立つときの大きな幻想に比較して、これほど悲惨な幻滅を思い描くことはできません」(169頁)。放蕩息子の心情では、幻想から幻滅への飛躍的転換がなされるが、そこから軽い驚きとそこはかたないおかしみが醸しだされる。自らが思い描いた、幻想の愚かさを現実から一步離れた柔軟な視点から直視すると、悲惨さや怒り、屈辱の体験でありながら、滑稽味が何となく感知され微笑を誘うのである。

『我に返り』、過去を思い起こし、自分の罪責を認めるとき、はじめて現実にたいして正しい関わり方を再発見できるようになるのだ、と言ってもよいのです」(171頁)。本書で「放蕩息子」というたとえが象徴的に表現しているのは、疎外体験を経た後になされるべき「自分自身を再発見する鏡」(178頁)という隠喩(巧みな転用)である。それは明瞭な

自己像を獲得することによって、つまらない日常ではなく手応えを感じる日々を送らせるのである。

「これまで夢中で(=我を忘れて)生きてきた彼は、ようやく正当な《分別》を取り戻し=『我に帰る』のです。あらゆる自己正当化は放棄されます。彼は、自分が未成熟なまま、ただ人生の野望に駆られて、軽率に無責任に突っ走ることによって不幸の中に転落したことを自覚します。こうして初めて罪責の告白が可能となるのです」(123頁)。「真の帰郷は、疲労や諦めからではなく、ほんとうの《回心》からなされねばならないからです」(183頁)。著者は真に帰郷するためには、正真正銘の回心が必要だと力説する。

次に兄の方に目を向けてみよう。「父にたいする兄の返答には、誇り高い自己義認と業績=報酬論がこだましているようです」(130頁)。「兄の非難の最大の理由は、自分の長年にわたる厳しい労働にたいして弟の快適で享樂的な生活を対比することにあります」(131頁)。「兄にとって、父の家は、いわば牢獄のように禁止と命令との垣根でとり囲まれており、その中で彼は我慢しながら奴隷労働に従事していたにすぎなかったのです。ちょうど、家を出て行くとき弟が感じていたように」(174頁)。

この一文からは生活の窮屈さに我慢ができず逃避したのが弟であって、それに対して自己を押し殺してじっと耐えていたのが兄だ、と推察することができる。兄弟は生家において社会的な生き甲斐を見出せず、専ら鬱積感や閉塞感を共に募らせていた。だが、その後における対応の仕方が率直であったか、否かの点で異なったのである。

R. ブルトマンは「このたとえば、これまで言い習わされてきたような一人の《放蕩息子》ではなく、正確には二人の《放蕩息子たち》のたとえと呼ぶべき」(132頁)と語るが、著者はそれに共感する。「この物語は、弟のみでなく兄もまた、この新しい未来に向かって開かれていることを示しています。イエスのたとえば《希望》の物語なのです」(133頁)と締めくくり、たとえの主題が希望であることを強調する。著者は、本来的な自己を見出せないままにいる兄に対しても、また弟にも等しく優しい眼差しを向ける。

最後に、著者はそれではこの物語の主役は一体誰なのか、との役柄論的な問いかけに答える。「このたとえばの中で、ほんとうに中心的な人物は、じつは兄でも弟でもありません。ここで、ほんとうに支配的な人物は父親ではないでしょうか。弟の帰還を待ちうけ、また怒る兄をなだめて共に祝うように招く、父の愛のイニシアティヴが光っています」(135頁)と語り、登場人物の役回りを探る上でキリスト教的世界観への回帰を促す。結果的に、「この父の愛—神の愛—は、イエスが告げる福音そのものをあらわしています」(136頁)、と主張する。

5. テキストの普遍的意味

著者は聖書の物語が、普遍的な性格を帯びていることの例証のために、S. シュミッツの書物『聖書の人物に自己を再発見する』(1988年)から以下の文章を引用する。「聖書テキストは、イエスをめぐる歴史的に一回的な状況について答えるだけではなく、くり返しあ

られる典型的な、いわば人間性に共通する問いにたいしても答えるはずではないでしょうか」(164頁)。

シュミッツの見解によれば、聖書テキストには精神の普遍的なものへの歴史的な高まりが秘められており、それは人間的な課題でもあるのだ。現代に生きる私たちはそうした性格の物語から一体何を学ぶべきなのか。これは既述のように本書の執筆動機であるが、この課題に対して著者は仙台市で東日本大震災を体験した後、改めて次のように述べる。

「私たちは、地球資源の乱費者として問われています」(180頁)。「そもそも自然界においては起こりえない核分裂の連鎖反応を人為的に起こさせるという試みには、許しがたい人間の傲慢がひそんでいます」(182頁)。人間は科学技術優位の立場から不遜にも自己中心的幻想を抱いてきたが、その愚かさを自覚することによって「未成人性から脱却」(178頁)するべき、との考え方がこのくだりには打ち出されている。とりわけそれを嘲笑する自覚こそ、本書を彩っているユーモア感覚の原点だと思う。

「《放蕩息子》にとって、父からの離脱は、未熟さゆえの無分別な行動だったとすれば、いまや父の許への帰還は、正しく責任を引き受けることを知った者の成熟した決断となったのです」(171頁)。かつて放蕩息子が己の短慮から旅立つ際に行った「未熟な決断」に対して、「成熟した決断」という概念が、前者と次元を大きく異にするものとして提起される。それは疎外を前提として自己へ回帰する際になされる決断に他ならない

「現実の生の限界を認めること、行動から生まれた結果にたいして責任を引き受けることを問われるのです。『わたしは…罪を犯しました。もう…資格はありません』。この独白には、彼が自分の悲惨な状況について、もはや外的な事情や条件、すなわち、災難や運命、社会や体制などに責任を転嫁するのではなく、それをはっきり自分自身に引き受けている悔改めの一回心の一声を聞きとることができるでしょう」(170頁)。

著者は息子が内行的に行った独白の中身に着目する。そこには責任逃避や責任転嫁ではなく、自己責任の契機がはっきりと自覚されているのではないかと指摘する。これまで作られてきた自分を否定的に対象化しようとする、明確な意志が認められるのである。

経済の高度成長期が終焉し、衰退へ急速に方向転換するに伴い、生の限りない拡大を夢見る人間中心的な幻想がしばみ、今やその先に来たるべき老化と死に対する関心が台頭している。こうした傾向は超高齢化社会を迎えつつある現今とも重なり合い、ますます加速されていくものと思われる。核の決定的破壊力をはじめとして、地球温暖化や様々な環境破壊・汚染がはびこり、今や人類レベルでの絶滅が近づいているのではないかと。このような危機意識も拡がりつつある。

「イエスの《放蕩息子》のたとえば、こうした現実立たされている私たち自身が『我に返る』こと―バルトのいう《罪》の自覚と悔い改め―を何よりもまず問うているのではないのでしょうか。それと同時に、《放蕩息子》のメッセージには、それを人類の希望の物語にする決定的なモチーフもまた秘められていることを忘れてはならないでしょう。すなわち、現代の文明世界は、懐疑と過信、絶望と幻想とのあいだを、くり返し行きつ戻りつ

してきました。こうした動揺の中に立たされた、この世界に生きる人間を、それでもなお根源的に支え、つなぎとめているのは、このたとえ全体に示された《神の愛》ではないでしょうか（182-183頁）。

本書では、人間と現実に対する根本的な知見を創出するような議論が繰り返されてきたが、この一節はそれを踏まえた上で著者が渾身の力で語った、キリスト教観の表明なのでとりわけ説得力がある。氏の見識によれば、この世で人間は「万能的作為の妄想」（186頁）と、「強迫的な不安心理」（186頁）の間で揺れ動く宿命にある。しかしイエスにおいて開かれた新しい「神の国」のメッセージは、それから人間を解放する約束を含んでいる（186-187頁）。かくて万能感と不安感をめぐって動揺する先にあるのは滅びなどではない。

人間を根源的に支えているのは、物語全体を通して私たちに語りかけている「神の愛」なのであり（183頁）、繰り返すことになるが、イエスが告げる福音そのものなのである。私たちは著者の導きによって、「明日への希望」という福音のメッセージを、造形が題材とされた第一部で感性的に味わい、解釈が題材とされた第二部で知性的に得心することができたのである。神の愛は悲しみ悼む人々と共に、手を取り合って生きる責任主体へと、私たちを目覚めさせてくれる（187頁）。こう力強く語って本書は閉じられる。

●書籍情報：宮田光雄著 新書判『《放蕩息子》の精神史～イエスのたとえを読む～』新教出版社、2012年7月刊行

東北芸術文化学会誌『芸術文化第17号』所収